

完全順次式でたどる

邪馬台国への道

塚田 和正

まえがき

魏志倭人伝に記された邪馬台国への旅程は、その論者の都合により、解釈方法や、記された字句の訂正によって多くの異なる結論が導かれてきた。

本論では原点に戻って、書かれた通りの順序で読み、記された通りの旅程によって、邪馬台国への道をたどってみた。

その結果、倭国の首都のあった邪馬台国には、九州を一周して到着できた。これは卑弥呼が倭国全体を見せたいために、魏の使節を遠回りさせたことにより、その旅程が魏志倭人伝にそのまま記されたからであろう。

一、倭国は民主的な連合国家であった

当時の中国で理解されていた倭国は九州である。倭国は、九州各地にあった小国の連合国である。この連合国は、武力の強い国が、他国を力で抑えつけて支配するよ
うな形態ではなく、争いを話し合い、仲裁で治める平和的な連合国であった。倭国連合の王は、世襲制ではなく、連合各国による話し合いにより選ばれていた。

二、連合国の王は首都の宮殿で政を行った

連合国の王の役目は、小国間の争いを平和的に解決することであった。これが成り立つためには、王が敬愛され、信頼されていることが重要であった。王の信用が失われると、仲裁に入ることが難しくなり、小国間の衝突や争いに発展した。卑弥呼が女王となる七、八十年前から倭国連合の仕組みができていた。連合国王は、連合国の首都に宮殿を構え、政を行った。首都の場所は、その時々
の王によって移り、卑弥呼の時代には邪馬台国にあった。

三、卑弥呼が倭国の王に選ばれた

卑弥呼が王となる前は、倭国は乱れて、誰が王となっ

ても小国間の争いは収まらない状況にあった。これらを治められる連合国の王として、各国の王の中から探し出したのが卑弥呼であった。卑弥呼は投馬国の女王であった。投馬国の女王を押す国が多く、民主的に卑弥呼を連合国の王とすることに決まった。この頃の連合国の首都は邪馬台国の地に置かれていた。卑弥呼は投馬国から連合国の首都であった邪馬台国の宮殿に移った。

卑弥呼の政は小国間で信頼を得ていた。

四、卑弥呼は倭国の王であって邪馬台国の王ではない

この頃、邪馬台国は、連合国の中で地勢的な中心にあったことから、首都の地になった。その地が現在の福岡県の朝倉と比定される。小国の一つであった邪馬台国は、ここが倭国の首都となり宮殿が置かれることで栄え発展した。邪馬台国の地には、倭国の王とは別に邪馬台国の王もいた。

五、倭国は九州連合国であった

この連合国倭国は、おおまかに北九州、中九州、南九州の三地方に別れる。その主要な国については、井上悦

文著「草書体で解く邪馬台国の謎」を参照し、邪馬台国は朝倉、狗奴国は熊本、投馬国は殺馬国の写し間違いであって、鹿兒島とする比定地を採用した。

中でも邪馬台国のある北九州は、国数、人口、経済力、文化の点で、連合国の国力の半分以上を占めていた。中九州は熊本周辺一帯で、島原湾を支配する大国の狗奴国が中心であった。南九州は鹿兒島、宮崎周辺一帯で、鹿兒島湾の奥深く霧島地方を国土とする投馬国が中心であった。

六、大国の狗奴国は卑弥呼の連合国に敵対した

邪馬台国の南方に位置した狗奴国の男王を連合国の王に押す国々もあった。狗奴国の王は、自分は大国の王にも関わらず連合国の王になれなかった不満もあり、卑弥呼が連合国の王であることを認めなかった。卑弥呼の政に敵対したことから、連合国から追放された。

七、伊都国は出入国を管轄する官庁所在地

伊都国は、出入国を管轄する官庁があり、外国からの駐在者や旅行者の滞留施設などが備わっており、出入国

するには絶対通らなければならぬ場所であった。

伊都国は、外国からの使節といえども、最初に行かなければならない地であった。

中国からの使節は、最初の目的地の伊都国に行くため末蘆国に上陸した。

使節が上陸する末蘆国の港と倭国の都があった邪馬台国の中間の便利な地点に伊都国があった。

八、卑弥呼の連合国を支えた投馬国

投馬国は九州南部に位置し、鹿児島湾奥に都を置き、霧島連山一円の現鹿児島県、宮崎県にまたがる一帯を領土とし、周辺の小国を従える大国であった。投馬国の女王であった卑弥呼が倭国の王に選ばれ、都のある邪馬台国に送り出された。投馬国は邪馬台国にある卑弥呼の宮殿を守る兵士などを派遣、倭国の政を支えた。倭国としても、連合国の体制を維持するためには、投馬国を重要国として待遇した。

卑弥呼亡きあとに男王を起てたが、争いが収まらないことから、卑弥呼の一族である菟予を投馬国より迎え、女王としたことにより連合国は鎮まった。

九、魏志倭人伝に詳しい旅程はなぜ

魏志倭人伝は、倭国への旅程の説明から始まる。なぜ詳しい旅程が必要であったのであろうか。単に東方の海に浮かぶ、文明の遅れた島国を紹介するものであれば、倭国の場所は距離と方角をおおまかに示せば済むと考えられる。そこに記されている詳しい旅程は必要かつ信用できるのであろうか。

十、旅程こそが正確性を必要とする最重要情報だった

使節や有事における軍の派遣などに備えて、旅程は詳しく正確な情報を記すことを要求されたのではないか。従っていいかげんな旅程を書くことは許されなく、よく調べ、確かめ、吟味された内容となつてに違いない。よって、ここに示された方角、距離、日程などは単純な誤記を除けば、間違っていないと考えるべきであろう。

十一、当時の人は距離、方向感覚は優れていた

当時の人と現代人を比較してみると、現代人は多くの文明の利器を使うことによって、動物的本能である方角、

距離などを体感でとらえる能力が、当時の人より退化していると考えられる。当時の人は、本能的に方角を読み、視力もよく、数十kmぐらい先の目標物が判別でき、その距離も体感で読めたであろう。旅程に記された方角、距離などが持論と矛盾が出ると、当時の人は方角、距離感覚が鈍いため、読み間違えていると結論づけているが、当時の人の方が、感覚が冴えており、大幅に読み違えることはなかったと考えられる。

十二、完全順次式で旅程を解く

史誌では旅程が重要事項であったことから、魏志倭人伝の旅程に記された距離や方角を大幅に間違えて編纂することなどはあり得ない。このことを前提として、魏志倭人伝に記された旅程について、書かれた文章の順序とその方角、距離、日程に関する文言を一字一句読み変えることなく、完全順次式で邪馬台国への行程を読み解いた。

十三、完全順次式を可能とする新解釈

完全順次式で矛盾なく読み解くために新しい解釈を取

り込んだ。

旅程に記されている「水行」「南至」の解釈では、多くの論者により、記されている方角や日にちを読みかえる、あるいはこの部分だけ順次式から放射式に変えるなどの異なる解釈がされている。

本論では、「水行」とは海岸線に沿って小舟で移動すること、進む方向は海岸線に沿う方向とする。「南至」とは出発時の方向が南ということを意味し、出発地では海岸線を南の方角に進むが、あとは海岸線に沿う方向となるため、進む海岸線の地形により、到着点は出発地より南とは限らないとした。

また出発地の海岸線を南に進むということは、その海岸線が南北に走っていることなるため、その条件に合った場所が出発地となる。

この新解釈を採用することにより、完全順次式で旅程を矛盾なく読み解くことができた。

十四、旅程を読み解く

1. 渡海

① 始渡一海千余里至对海国

② 又南渡一海千余里名曰瀚海至一大国

③ 又渡一海千余里至末蘆国

旅は、海を渡って、韓国から対海国（対馬）、対海国から一大国（壱岐）までの路程については、多くの論者に異論はない。

次の末蘆国を、発音が近い松浦半島とする論者が多い。しかしこの間の距離は千余里の半分程度であり、距離的に合わない。また松浦半島を末蘆国とする論者には、伊都国は発音が「イト」である現糸島市内を比定する人が多い。

松浦半島に上陸して、遠く離れた伊都国に陸行することになるが、地理的には伊都国が糸島市内とすると、壱岐から直接糸島市の海岸に上陸した方が、陸行の距離も短く、容易に伊都国に着けることになるので、それより遠い松浦半島への上陸は常識的にはあり得ない。

一大国から末蘆国へは、海を渡る方角が記されていないので、方角の制約はない。東方に位置する宗像市付近が、旅程に記された千余里先の末蘆国に当てはまると考える。

当時の末蘆国（宗像）には玄界灘を代表する港があり、

操船技術に優れた漁民がいて、山陰地方との交易や壱岐との航路があったと考えられる。宗像の港に上陸することで、次の陸行に繋がりを果たせることができる。

2. 陸行

④ 東南陸行五百里至伊都国

⑤ 東南至奴国百里

⑥ 東行至不彌国百里

玄界灘に面する末蘆国（宗像）から陸行で東南五百里にある伊都国は、海沿いではなく内陸にあることになる。

末蘆国と使節等が滞留する伊都国の間は、頻繁な往来があったであろうから、その旅程に示された方角、距離に間違いはあり得ない。次に東南百里に奴国、さらに東に百里で不彌国となるが、これらの間は見通せる範囲であり、方角、距離共に大きな誤差はないと考えられる。

末蘆国が宗像として、陸行は東南方向であることから、次の水行が始まる海は、近くの周防灘と考えられる。

この間の伊都国、奴国、不彌国が、旅程に記された方角と距離で当てはまるのは、伊都国は飯塚市、奴国は田川市、不彌国はみやこ町付近と考えられる。

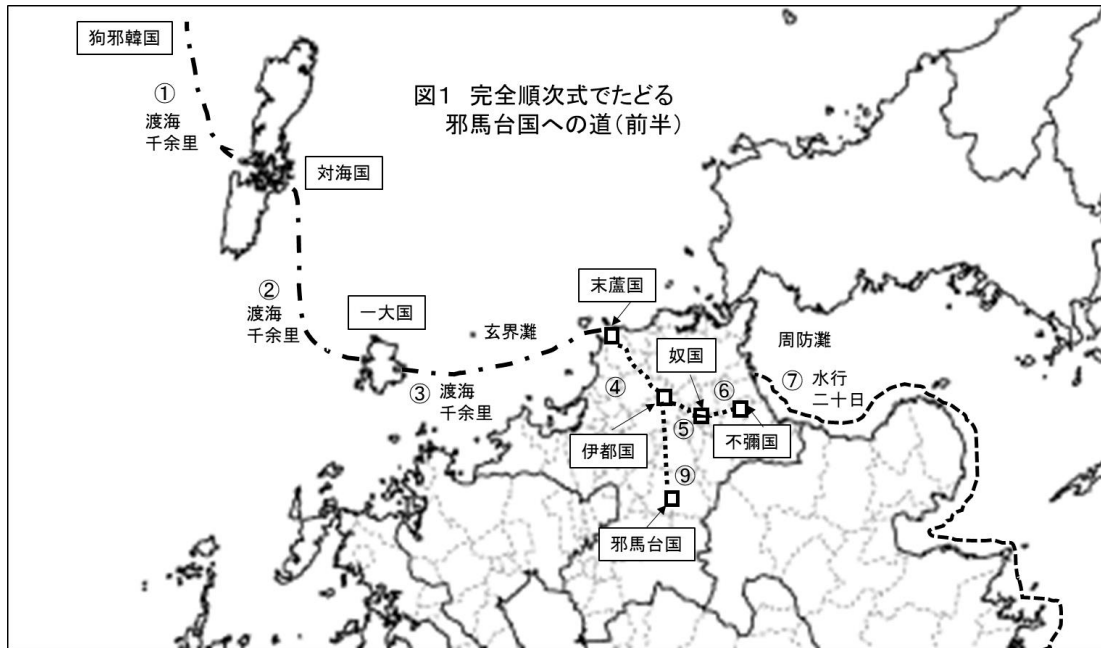


図1 完全順次式でたどる
邪馬台国への道(前半)

3 水行

⑦ 南至投馬国水行二十日

不彌国を経て南に水行が始まるので、近くに港があることになる。ここでの水行とは海岸線に沿って小舟で移動することであり、南に水行するという場所は、海岸線が南北に走っていることになる。北部九州で南北に走っている海岸線に当たるのは、瀬戸内海に面した周防灘しかありえない。

周防灘には、瀬戸内海を使って、周辺国と交易する立派な港があったであろう。その港から南へ水行二十日の旅が始まったと考えるべきである。南への水行とは出発点の方角が南ということであり、その後は、海岸線に沿って進むため到着地は南とは限らない。

九州の東海岸沿いに南下して進み、水行二十日で現鹿児島県にある投馬国の都に到着する。

小舟による水行では、夜は上陸して休むため、投馬国到着前に、他の小国にも立ち寄っていたと考えられるが、記されていない。

次の水行も南に出発することとなるので、この条件に

当てはまる場所は地形的に鹿児島湾内に限られる。よつて鹿児島湾を北上して、現在の霧島市近辺にあった、投馬国の都に到着した。

鹿児島湾から出発する水行は南に限られることから、次の水行の旅へ合理的に繋げることができる。

4・水行・陸行

⑧南至邪馬台国女王之所都水行十日陸行一月

投馬国の都から南に十日間の水行が始まる。鹿児島湾を出るには南下することになるため水行は南となる。鹿児島湾を出ると、九州の西海岸沿いを北上するが、島原湾から有明海を水行すると、敵対国の狗奴国の支配地域を通ることになり危険なため、天草の西海岸を北上して、長崎半島に上陸した。

長崎に上陸して陸行一月の旅となった。ここから都のある邪馬台国までは連合国に属する地域であり、立ち寄った多くの小国から歓迎を受けながらの旅が続き、一月間を要して邪馬台国に到着した。

不彌国以後の水行、陸行は、詳しい旅程が記されていない。この要因としては、使節は不彌国まで行って、そ

の後は部下に行かせて、その話を聞き取ったことが考えられる。

十五、旅程は九州一周の旅を示した

完全順次式で邪馬台国への道をたどると、魏志倭人伝に記された旅程では、倭国を一周する遠回りの道となった。

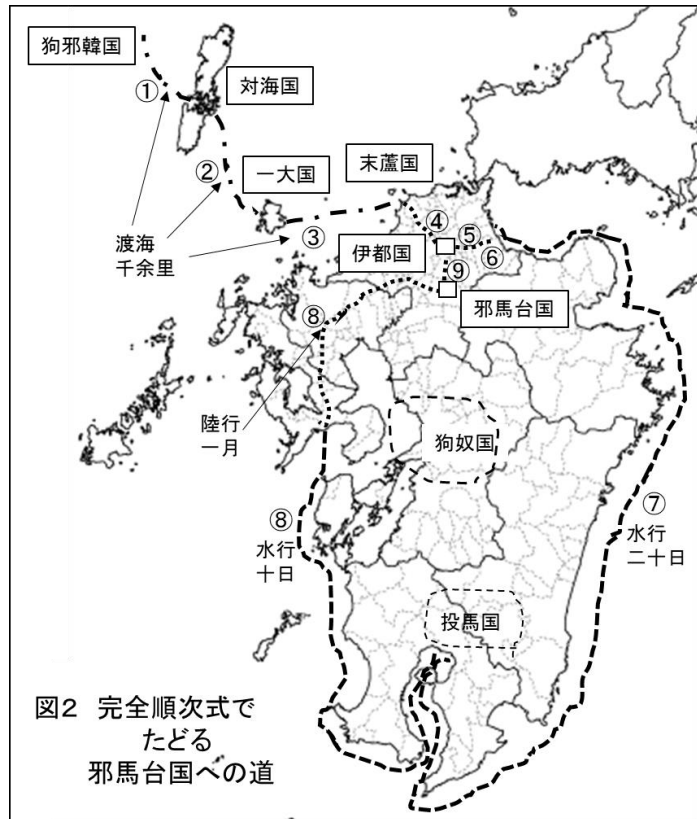
水行二十日以降の旅程は、卑弥呼の要望によって付け足された旅程ではないか。

卑弥呼は治めていた倭国全部を見せたかった。また卑弥呼と深い関係にあった投馬国を知って欲しかったものと考えられる。

⑨自郡至女王国万二千余里

使節の滞留地の伊都国から倭国の首都のある邪馬台国へは、直行できる整備された陸路があつて、通常はそこを利用していただであらう。

付け足した旅程と区別するために、実距離の万二千余里を示したものと考える。



あとがき

本論では、完全順次式で魏志倭人伝の旅程を読み解いた結果、それは九州を一周して邪馬台国に到達するルートであった。これにより魏志倭人伝の真実に一步近づけたものと思う。

旅程を読み解くに当たり、投馬国の扱いについて、

大きな疑問があり、合理的な解釈が必要となった。それはなぜ邪馬台国から遠く離れた投馬国に行く必要があったのか、なぜ九州一周の途中で投馬国に立ち寄る必要があったかである。

これは卑弥呼にとって、投馬国は重要な国であったかに違いない。卑弥呼が特別に命じて、使節に九州を一周させ、その途中で投馬国に立ち寄せた。それは投馬国の存在を記録に残すよう仕向けたものと考えられる。

卑弥呼と投馬国との間に、どんな関係があったのか。これを説明できる合理的な解が必要であった。

その解として本論では、二つの結論に至った。

1. 卑弥呼は倭国の女王に選ばれる前は、投馬国の女王であった。卑弥呼にとって投馬国は母国になる。

2. 投馬国は霧島連山一帯の鹿児島から宮崎県にまたがる地域であった。この地域は古事記などに記される神話の地である。

卑弥呼の母国投馬国の地は、古事記の神話の地と重なることから、新たな歴史観が生まれてくることを期待する。